

お返し
を
しませんか？

生む！
徒めつ
合長

立ち読み版



| | | |
|----|---------------------|-----|
| 序章 | ヤンチャな幼馴染み | 006 |
| 一章 | 彼女はいじめっ子で生徒会長でメイド!? | 008 |
| 二章 | 彼女のいじめはセクハラばかり! | 027 |
| 三章 | イジワル彼女との初体験! | 063 |
| 四章 | いじめっ子彼女とのエッチな責め合い? | 105 |
| 五章 | イジワルな彼女と僕の本音 | 148 |
| 六章 | いじめっ子彼女のラブな本音 | 179 |
| 七章 | いじめっ子彼女とのダンスタイム | 215 |
| 終章 | いじめっ子彼女の最後のイタズラ! | 247 |

登場人物紹介

Characters



くじょうみずき
九条瑞希

気が強く、幼少期の幸久を振り回していた、幸久にとっては頭の上がらない少女。しかし、数年ぶりに再会を果たした瑞希は別人のようになっていて……。

かぐらざかゆきひさ
神楽坂幸久

幼少期は小柄で可愛い外見だったため、よく女の子に間違われていた。そのため、女の子の友達が多かった。成長した現在も女の子によく構われてしまう。

「それじゃ、こっちはどうかしら？」

続いて机に飛びつきデスクトップを立ち上げる。最新式のPCは間もなく起動を完了し、

「あ、ロックかかっている。ユキのくせに用心深いわね」

「き、基本だよ。僕だつてプライベートはあるんだから」

さすがにこれはどうにもなるまいと幸久は勝ち誇り胸を張る。

「ぐぬぬ、ちよこざいなっ……これでもない、これも違う……」

癩しやくに障さわるのか、瑞希はそれでも諦めなかった。名前や苗字など、思いつく限りのパスワードを次々と打ち込んでいく。

無論、そんな適当で開くロックではない。悔しそうな瑞希を見て幸久は密かに胸がすく思っていた。

「大切な思い出の名前だからね。そう簡単には分からないよ」

「ぐぬぬ、ユキのくせにい……！」

やがて案が出尽くしたのか、彼女の指が空打ちする。どうしても納得できないのか、ついには頬を引っ張るといふ実力行使に訴えてきた。

「いひゃひゃひゃっ！ みじめにええいひゃい！」

「わたしに隠そうとか超ナマイキ！ さあ言いなさい、でないとほっぺ伸びちゃうわよ？」

「ひよんにやっ！ わ、わひゃっひゃよ！ いたた、分かったからあ」

結局幸久は折れていた。何とも短い勝利の愉悦だった。

「ふふん、最初からそうすればいいのに。ユキのくせに意地張るから」

逆に勝ち誇られ恨めしく思いつつ、幸久は渋々キーを叩く。

——SHIMAKAZE

「えっ？ それって……」

表示されたパスワードを見て瑞希は目を見張った。

「島風って……確か、わたしがユキに買ってあげたプラモデルの名前……」

「うん。僕が戦艦のプラモ好きなの知ってるでしょ？ あれ、初めて作ったものだから」

思い出の名前とは、そのプラモのものだった。子供の頃、親が厳しくて買ってもらえなかったところを、貯めていたお小遣いをはたいて瑞希が買ってくれたもの……。

「あれ、ほんとに嬉しかったから。あれがきっかけで親も許してくれたしね。今でも大事にとつてあるんだ」

それは瑞希との思い出の中で特に輝いていたものだった。わんぱく三味の瑞希ではあったが、こういった優しさも時折見せてくれる女の子だった。

「……そっか。覚えててくれたんだ……」

「もちろんだよ。感謝しろって散々いわれたから」

「もう、余計なとこまで覚えてなくていいのに！」

瑞希は拳で軽く少年の胸を小突いた。

「……でも、嬉しい。わたしもあれ、いい思い出だから」

なんだかんだで悪い気はしなかったのだろう。珍しく、というよりは初めて、瑞希は感慨深そうな微笑みを浮かべた。

「ほんと、ユキつてば変わらないのね。妙なところで律儀なんだから。あの玩具だつて大したものじゃないのに」

「それは違うよ。ミズねえがずっと貯めてたお小遣いで買ってくれたんだよ？ 大事にして当然だよ」

何の迷いもなく少年が言うと、少女は急に頬を赤らめ唇をへの字にした。

「っ……………！ バカ、そういうトコあるから、わたしユキのこと……………」

「……………ミズねえ？」

「……………あのね。実はわたし……………メイドのほかにも、大事な役目があるの」

なぜか瑞希は視線を逸らして、長い睫毛まつげで瞳を煙らせた。何だか妙に恥ずかしそうに、ミニスカートから覗く太腿をそれとなく擦り合わせている。

「その……………あのね、わたし、ユキの、ふ、筆お……………しを……………」

「？ 筆……………なに？」

「だからっ、その、は、初めての相手、なんかを……………」

瑞希の指先が机を忙しく叩いた。緊張しているのか、手近にあったマウスを握って無意味にカチャカチャ押しまくる。

やがて決心したかのように、彼女はぎゅっと目を瞑り頬を赤らめて、

「もうっ、わたしがもらってあげようっていうの！ ユキの、どっ、童て——！」

——カチッ。

と、細い指が強くマウスをクリックした。途端、画面が変わって二次元少女の絵が現れる。偶然にもどこかのフォルダを開いたらしかった。

反射的にそれを見た二人は——瞬時に表情を凍りつかせた。

「——なあにこれ？ どおいうこと？」

「いや、そのつらくと、友達が、あげるっていうから……！」

「ふうん、友達がねえ。ズイブンといいお友達なこと」

さっきまでの雰囲気はどこへやら。目元をヒクつかせて瑞希はジロリと幸久を見やる。

白いこめかみには、思い切り青筋が浮き出てしまっていた。

ちなみに画面には、十八禁ゲームのロリ少女の裸体が写っていた。

よりにもよってそれを開くなんて——と、幸久は偶然というものを呪った。

「——で？ なにか申し開きは？」

「ないです……っっていうか、持っていないとは一言も……」

「なにか言った？」

「い、いいえなにもっ！」

痛む頬をさすり、床に正座したまま縮こまる幸久。

あの後、いたく機嫌を損ねた瑞希は、散々ほっぺをいじめた後でなおも憤懣ふんまん冷めやらぬ状態だった。

「まったく。なんにも知らない顔してちゃっかりエロゲーなんてやって。おまけになに、ツルペタ幼女？ ユキつてばソツチ系なわけ？」

「ち、違うよ！ たまたまそういうゲームだっただけで、そっち系が好みってわけじゃ」「好みじゃないのにプレイしてたのね？ ふうん、あつそお」

椅子に座って腕組みする瑞希は、口こそ笑っているものの目は欠片も笑っていない。
(まずいよ。ミズねえが思い切りなにかするときの目だ)

幸久の背筋を強烈な悪寒が走りぬける。

「それじゃ、実際にしてもらおうかしら。今ここで」

座ったままズイッと身を乗り出すと、瑞希はニタリと冷たく笑った。

「えっと……な、なにを？」

「一人エツチ」

「……………は？ い、今、なんて？」

「だから、ひ・と・り・エ・ツ・チ」

「え——ええええええつ!!」

幸久は後ずさりベッドの縁に背を預けた。

瑞希は追いかけて腕組みしたままふんぞり返る。

「できるでしょう？ 好みでもない、それも二次元の女の子なんかには欲情しちゃうほど溜まってるんだから」

頬を引きつらせた少年を、鋭い眼光が見据える。

「ほら、脱ぐ」

「で、でもっ、なんで急にっ？ 意味も分からな——」

「全力で穴責めされたいの？」

「そっそれだけはっ?! はい……脱ぎます……」

こうなってはもうどうしようもないことを、少年は骨身に滲みて思い知っていた。

仕方なくスウェットズボンに手をかけると、おずおずと脱いでパンツを見せる。

それにも指をかけ、もう一度だけ目で問うと、瑞希はニッコリして頷いた。

「脱いで♪」

「うう……はい……」

結局のところ自分は彼女には逆らえないのだ。本能的にそう実感し、幸久は泣く泣くパンツまでをも下げていた。

「くす、どれどれ……へえ、これがユキのなんだ……」

ニヤニヤして覗き込んだ瑞希は、しかし実物を目にして少し緊張の気配を見せた。

「思ってたほどじゃないけど、昔よりは大きいのかしら。子供の頃脱がしたときはもっと小さかった気もするけど……」

むき出しになったペニスは、主人の気分を代弁するようにしょんぼりと縮こまっていた。おまけに亀頭部分は、半ば包皮で覆われている。

「皮も被っちゃったままで、まだまだ子供ね。ほら、いつもみたいにやってみなさい。じつと見てあげるから」

興味半分、緊張半分といった様子でペニスを見つめ、瑞希は小さくアゴでしゃくった。うう、と情けない声を出すと、幸久は仕方なくペニスを握る。

(ひどすぎるよミズねえ。やっぱりいいじめっ子なんだ)

逆らえない自分もだめだが強要するほうはもつと悪い。あまりの恥ずかしさに心中で恨みごとを言わずにはいられなかった。

それでもやむなく指を動かしてサオの部分をしごいていく。

だが興奮どころか屹立きつりつすらしていないペニスは、ろくに快楽を得られなかった。

「なによ、普段からそんなものなの？ ぜんぜん気持ちよさそうじゃないじゃない」「し、仕方ないよ、恥ずかしいし、その、なんにもなしじゃ……」

無反応さに瑞希は不満げに鼻を鳴らしたが、こればかりは仕方なかった。

こんな状況で勃起できるほど彼は猛者ではなかった。そもそも興奮できる要素がないのだ。これでできたら相当な変わり者に違いない。

「っ……まったく、しょうがないわねっ……」

しょんぼりしてしまふ少年を見て、瑞希はしばし逡巡しゆんじゆんした。頬を赤くして唇を噛み、拗

ねたように目を閉じる。

やがて小さく苦笑すると、再び椅子に座り、躊躇いがちに腰を軽く前に突き出す。

「それじゃ……いいものを見せてあげる。とっ、特別よ。ユキの、大きくなったところ……見ただけ、だから……」

えっ？ と驚く少年の前で、ストッキングに包まれた両足が肩幅ほどまで左右に開いた。次いで彼女の細い指先が、メイド服のミニスカートを摘み上げる。

「っっ！ み、ミズ、ねえ……っっ！」

「こ、これなら、できるでしょ？ ほら、大サービスなんだからっ……」

なんと瑞希は、スカートを捲って中身を見せてくれていた。

（ミズねえの、パンツっ……綺麗だ、純白だっ……！）

異性の生下着を初めて見て、少年は鼻息を荒くしてしまった。

メイド服に合わせたのだろうか。白いショーツは縦にフリルを重ねたようなデザインで、軽やかな雰囲気のが可愛らしいものだった。

しかもなんと、両サイドを蝶結びで縛ったいわゆる紐パン。股布の食い込みもかなり鋭く生地そのものが透けるほど薄くて、ともすれば中が見えてしまいそうだった。

（ミズねえのスカートの中、すごく色っぽい……ああ、どきどきする……）

キュートかつアダルトな下着姿は意外なほどよく似合っていて、女性らしい繊細な肌とまろやかな肉付きをより美しく際立てている。あらわな太腿もむっちりとしていて艶めか

しく、ガーターベルトとの組み合わせが異様に大人っぽかった。

「あ、ありがたく思いなさいっ、これでもできないなんて言ったら許さないからっ……！」
そう言つて恥ずかしげに身動きするのがまた何とも初々しくて堪らない。食い入るよう
に見つめる少年は、急速に股間が熱くなつていくのを感じた。

「え……？ あ、ああつ、うそ……ユキの、そんなに大きく……！」

見る間に硬化していくペニスを見て、瑞希は驚きの表情を浮かべた。

興奮し屹立した少年の肉棒は、最初の軟弱な外見から大きく様変わりしていた。

包皮こそ剥けきらないものの、サイズで見れば決して軟弱などではない。むしろ平均を
上回つており、力強い反り返りが逞しさすら感じさせた。

「っ……や、やるじゃない。硬くなると、それなりなのね」

思わず圧倒されてしまったのか、瑞希の喉がゴクツと鳴った。

だが幸久が改めてサオを握ると、我に返つたように真つ赤な顔をニンマリさせる。

「んふふ、下着見ただけであつさり大きくしちゃうなんて、やつぱり溜まつてるのね。ほ
ら、早く……見せて。いやらしくオナニーするところ」

思惑どおり興奮されて悪い気はしなかったのだろう。彼女はもう少し腰を突き出して純
白の食い込みを近付けてくれた。

「みっミズねえ、ううっ、ミズねえっ……」

「はああ……そうよ、その調子……いやらしいユキなんて、そうやってるのがお似合いな

んだからっ……」

イジワルなことをまた言われても、少年は手の動きを止めることはできなかった。

正直いって想像以上だった。やはり本物には二次元にはない存在感があり、身動きするたび柔肌が揺らめいて無性に触ってみたくなる。これが現実の女体かと思うと、強い羞恥を感じる反面、触れた感触や挿入時の刺激を妄想せずにはいられなかった。

しかも彼女は、穴が開くほど強く見つめられると瞳を潤ませて呼吸を乱す。

「はああ……ユキが、見てる……わたしのショーツ……すぐく見て、オナニーしてる……」
「ご、ごめん……僕、こういうの初めてで……」

「なによ、綺麗なメイドさんいっぱいいるのに、誰ともその……してないわけ？」

「だって、恥ずかしいから……」

「……くす。相変わらずなんだから」

少年の言葉に気をよくしたのか、瑞希は再び笑みをこぼした。もっともその笑みは、先ほどよりもどこか親しげで柔らかい。

「じゃあ……こっ、こういうのは、どう？」

細い指先が腰に伸びて、左側のショーツの紐をそつと摘んで軽く引つ張る。

しゅるつと小さな衣擦れの音。硬く結ばれた蝶結びが少しずつ緩んでいく。やがて紐が力を失うと、締め付けが緩んだのか股布はかすかに秘部から浮き上がる。

「あはあ……だめよ、だめ……全部はだめ。でも……」

熱い吐息を漏らしながら瑞希は紐を左右に開いた。

「ここまでなら……見せてあげる。いっぱい、しこしこしなさい……！」

「みつ、ミズねえ、ああ色っぽいっ……こんな、僕我慢があ……！」

飛びつかんばかりに前傾して幸久は勃起をしごき立てた。さらなる誘惑に理性が吹っ飛ばされそうだった。

片方の紐を解いた彼女は、それを左右に開いて腰のラインをむき出しにした。そして秘部が見える寸前までショーツの前を開いてみせたのだ。

まさにもう一声。あと少しで恥毛が見えてしまうだろう。そんなギリギリのチラリズムが、少年の脳と股間を直撃していた。

「はあ、はあ、ああミズねえ、僕、僕っ……！」

恥を忘れて少年は肉棒を繰り返ししごく。いつものように皮ごとこすって亀頭にも刺激を加えていく。視覚的興奮で頭がカッカし呼吸が速くなっていく。

（ミズねえがこんなことしてくれるなんて！ それにエッチだ、どきどきしちゃうよっ！）強要されたことすらどうでもよくなっていた。彼だって健康な男の子。女子に触れたいし裸も見たい。相手が瑞希なことはまったく想像の範囲外だが、美しくなった彼女の痴態はその肉欲を大いに刺激した。

「はああ、ユキのおちんちん、あんなに、硬く……びくびくして、ヌラヌラして……」
瑞希もまた、射精へと突き進む肉棒を見て興奮の色を隠せない。



「つっくく！ はあっ、はあっ、はあっ……！！」

しばらく仰け反り痙攣し続けた瑞希は、やがて脱力しクタリとシーツに沈み込んだ。

「つ……バカ、ユキいつ……優しくしなさいって、あれほど言ったのに……」

「そんな、ちゃんとしたよ。それにミズねえ、ひよつとしていつちやって……？」

「つっくくバカっ、誰が童貞なんかにつ……」

彼女は睨んでまた頬をつねろうとした。が、力が入らないのか途中で諦めてしまった。

「……バカ。自惚うぬぼれないでよねっ……そんな簡単にイクわけないじゃない……」

今はそう言っただけ目を閉じそっぽを向くのが精一杯のようだった。

（ああ、今のミズねえ、最高に色っぽい……！！）

力なくベッドに横たわる姿はどうしようもなく官能的だった。強がりではしたが眼差しはトロンと蕩けているし、上気しきった赤い頬にはたくさん汗珠が浮いている。

そして何より、はつきり分かったクロツチの水気が感じていた確かな証拠。その奥をペニスで堪能できたらどんなに気持ちいいだろうかと想像と肉欲は尽きなかった。

「ミズねえ、僕、もう我慢できない……！！」

一度果てたペニスはすでに臨戦態勢にあった。否、実はあれから一度も萎えていない。

入りたい。女の子とセックスしたい。牡としての欲望が、少年の指をショーツにかける。

「あっ！ ま、待って、そこは……！！」

気付いた瑞希は困惑の表情でその手を遮る。

「でも、しっ、していいんでしょ？ だったら」

「それは、そうだけど……」

瑞希は身体を縮こまらせた。一番大切な部分はさすがにまだ抵抗が残るようだった。

（かっく可愛い！ ほんとにあのミズねえなのっ!!）

不意に見せた困惑の表情は今ままで一番か弱げで可憐だった。濡れた瞳は視線を彷徨わせ、迷う仕草ははつきりと初々しい。

その反応は間違はなく処女。強気でイジワルでしかし品行方正な彼女の、貴重な初めてもらえる予感に少年の心臓はどつくんどつくんと暴れまくった。

「でも欲しい……僕、このままじゃ終われない……！」

こんなところでオアズケにされたら気が狂ってしまいそう。そう思う幸久は、意を決してショーツを抜き取っていく。

「ユキ、ああユキ……ああっ……」

「ごめんミズねえ、優しくするから……」

さっきの教えを守りながらそつと脱がせていく。怖がらせないように、時間をかけながら。面積の少ないTバックは、くるくると丸まって足首から抜けた。

「脱げたよ。じゃあ……み、見ても、いい？」

「っ……ほんと、エッチなんだからっ。ちよ、ちよっただけよ……」

今さら引き返す気はないのだろう。精一杯強がると、瑞希はそおっと両足を開いてくれ

ていた。

「つっつっ!! こ、これが、ミズねえの……女の子のっ……!!」

「はあああ……や、やあ……!!」

ついに瑞希の大切な部分が幸久の目の前であらわになった。

それはかすかに覚えていたとおりの、いや、それ以上に美しい入り口だった。こんもりとした白い肉土手にスウと走るピンクの裂け目は、しとどに濡れて煌めいていてまるでルージュを引いた唇のようだった。

クリトリスは非常に小さいらしく、奥に隠れてはつきりとは分からなかった。恥毛は丁寧に整えたのか、淡い茂みが縦長に薄くあるだけである。

思わず見入ってしまった幸久は素直に綺麗だ、と呟く。すると瑞希は顔を背けて、バカ……と弱々しく罵倒した。

「は、早く、入れなさいよっ……したいんでしょ？」

「うん。じゃあ……いつ、入れるね？」

幸いにも準備は整っていたようだった。すでに割れ目の奥には、透明な愛蜜が溜まっていてその下の小ジワまで伝い落ちていている。

しかし幸久は、童貞ゆえになかなか上手くいかなかった。

「あ、あれ? こう、かな? 入らない……」

「んああ、やんっ! あふ、こすっっちゃ、だ、だめえ……!!」

覆い被さり正常位を試みるも、ペニスはつるんと入り口を滑ってしまふ。裏筋が何度もこすれるたびに瑞希は腰を媚震わせた。

「はあ、はあ、違つ、そこじやなくてえ……あふうん！ そんなつ……きやんっ！」

ピンクの粘膜が表面を擦られて染み出た愛蜜がカリに絡まる。そのたびににちゆりといやらしい音がして初心な入り口がヒクヒクと震える。

「はあはあ……バカっ、やつぱり童貞なんだから……」

可愛く悶えていた彼女だったが少し余裕を取り戻してもいた。少年の未熟さが逆にそうさせたようだった。

小さく笑つて両足を大きく開くと、照れ臭そうに自ら指でラビアを開く。

「ここ……ここに入るの。言つとくけど、優しくね？ その……わ、わたしも、は……初めて、だから……」

「っっ！ みっ、ミズねえ……！」

処女なのに、本当は恥ずかしくて仕方ないのに、それでもがんばって受け入れようとしてくれる姿を見て——幸久は初めて、胸の奥が苦しくなるような愛おしさを覚えていた。

（ああ……ミズねえのこと、すごく素敵に思える。大事つて思える。ううん、今までだつて大事だつたけど、こんな気持ち、初めて……）

最初は衝動的だった性欲に、今は別の感情が混じり始めている。強がる彼女を純粹に愛でてあげたい。素敵な初体験にしてあげたい。初めて味わうそんな感情に少年は密かに戸

惑った。

「そう、そこ……んっ、そのまま、奥にい……」

導かれるまま勃起をゆつくりと押し進めると、瑞希は小さく眉根を寄せた。

「ミズねえ大丈夫？　ほんとにいい？」

「いっ、いいからっ！　一気にかけてよお……っ」

小さく震える姿を見て、幸久は改めて彼女も緊張しているのだと実感した。

いくら幸久でもそれがどれだけ特別な瞬間なのかは分かる。女の子の初体験は男のそれより遥かに思い出に残るものに違いない。

そんな貴重な一瞬を委ねてくれると思うだけで、少年の心は急速に熱く燃え上がった。

(ミズねえ、僕は、僕はっ——！)

——ずぶっ、ぶっっ……！！

「くあっ——あああっ……！！」

サオが中ほどまで入った瞬間、瑞希は苦しげに呻いた。

「ああっ入ったっ……！！　すごい……やっ、柔らかいっ……！！」

半ばほどペニスを埋めたところで少年は快楽に身震いしていた。

ついに体感した乙女の膣内は、想像していたより格段に柔らかく暖かかった。隙間なく包み込む粘膜の感触は男を骨抜きにするに十分すぎると思えた。

だが悠長に浸ってなどいられなかった。彼女の強張りが肌を通して伝わってきたのだ。

「だ、大丈夫、ミズねえっ？ ああ血が……ごめん、ごめんね。僕のせいで、こんな……」
サオに伝わる鮮血を見て幸久は心から詫びた。愛おしいと感じたがゆえに、苦しむ彼女を見るのが辛かった。

「はあ、はあ……なによ今さら。覚悟してたんでしょ？ 男だったら堂々としなさいよ」
彼女はそう言つて唇を尖らすと、いつものように両頬を指で引つ張つた。

「まったく、大きいんだからっ。でも……平気。こんなくらいで参るわたしじゃないわよ。ケンカしたつて泣いたことなんてなかったでしょ？」

無論、強がりには違いなかった。女性の初体験は苦痛を伴うことくらいは知っていた。それでも彼女は痛みをこらえ、普段の顔で隠そうとしてくれる。

「思ったより……大したことなかったもの。こんなことなら怖がらなくても……じゃなかった、さつさと済ませちゃえばよかったかも。べ、別に怖がつてなんていなかったわよ！ そうよ、誰がユキ相手に怖がつたりなんてっ」

一人でぷうつと膨れる様が見えていて少し面白かった。同時に、ますます胸が熱くなつてきて少年は自然と頬を寄せていた。

「……ありがとうミズねえ。僕……嬉しいよ」

「え、ユキ？ ……あつ……」

——ちゅっ。

少年の唇が少女のそれと重なつた。

触れ合うだけの短いキスだが、もぎたての桃の甘みのような爽やかな感触を彼は味わう。

「ん……はあぁっ。ユキ、急にキス、なんて……！」

「ごめん。でもしたかったんだ」

「っくっバカっ、そういうのは、こ、心の準備、とか……」

なぜだが瑞希は急にモジモジし始めた。よほどキスに驚いたのか、ぎゅっと目を閉じ困ったように首を振った。

「こんな、こんな形でキスなんて……バカっ。もつとムードとか欲しかったのに……」

「……ミズねえ？」

「なんでもないっ。それよりほら、早く動きなさいってば。まさか女の子にやらせる気？」
少し恨めしげな瑞希の拳が少年の胸をぽかっと小突いた。

「もう……平気。これでもわたし丈夫なのよ。ユキみたくなよっちくくないもの」

彼女はそう言って少しだけいつものイジワルさを見せた。これでキスが効いているのか、本当に痛みは和らいだようだ。

少し元気が戻ったのが嬉しくて、少年はつい仕返ししていた。

「うう……ミズねえ、可愛くないっ」

——「ずんっ！ ずちゅっ……」

「きやうっ!! あはあぁ……！」

ちよつとだけムクれて幸久が突くと、瑞希は何とも可愛らしい鳴き声をあげた。

「はああ、ふ、不意打ちなんて、ず、ずるいつ……」

「だって動いてって言ったから。じゃあ、動くね？ 痛かったら言ってみてね、絶対だよ？」

「えっ？ あ、ちよつとユキ——はああっ!!」

念を押してから少年は少しづつ腰を動かした。何とか角度を把握すると、ゆつくりとゆつくりと彼女の中を探っていく。

（ああっ、気持ちいいっ！ これが女の子のおま○こっ……!!）

たちまち心地よい媚電が駆け巡りペニスはびくびくと脈を打った。

改めて味わう膣内感触は想像を上回るものだった。柔らかな肉がしつとりと肉棒に吸い付き、抽送に合わせて密着するように形を変える。まるで小さな筒状のゼリーに全体をなめらかに擦られるようで、オナニーなどとは段違いの気持ちよさがあった。

しかも今になると、表面全体が細やかなヒダの集まりであり、ツブツブして舌の感触に似ていることが分かる。けれど刺激は舌以上で、快楽中枢を焼き尽くすほどの鮮烈な快感が送り込まれた。

正直いつて一度射精してよかったと思う。でなければどうに果ててしまっていただろう。

「はあ、はあ、ううっ、ミズねえっ、これ、すごいよお……!!」

「はあ、はあ、ゆっ、ユキのだって、すごい……大きいじゃないっ……!!」

瑞希の方もまた、初めて味わう男根の感触に困惑と高揚感を隠せないでいた。

「はあはあ、す、すごい、こんなに、奥に届いて……ひあ深い、硬いのっ、こすれて

ええ……!!」

どうやら膣の奥の方が感度が高くていいらしい。エラが緩やかに深部の粒ヒダを引っかくと、びくつ、びくつ、と腰をヒクつかせ細いくびれをそつと振る。

そして刺激が繰り返されるたび、瑞希の仕草や表情にも確かな変化が生まれていった。

「はあ、はあ、な……なに？ 痛いのに、まだ痛いのに……奥つ、じんじんしちゃう……やだ、お腹ん中、熱くなつてきてえ……!!」

当初は少し険しかった眉根が、次第に柔らかく解れてきて綺麗なハの字を描き始めた。口元からは力みが消え、半開きになった唇から熱の籠もった吐息が漏れる。眼差しはどこかぼーつとしていき霞がかつてきたようだった。

「はあ、んはあ、やだっ、初めてなのに、お腹っ……焼けちゃうう……腰動いちゃうって、ユキの動きにい——んあああんっ!!」

(綺麗だ。素敵だ、ミズねえっ……!!)

まるで別人のように可愛らしく喘ぐ姿を見て、少年はだんだん行為に夢中になってきた。

「ミズねえ、大丈夫、痛くないっ？ 痛かったらやめるからっ……!!」

「はあはあ、平気、心配なんてされなくたってえ……!!」

長い髪を左右に振つてなおも強がる彼女だったが、吐息を弾ませるその表情はとても平気には見えなかった。

もつともそれは苦痛とは違い、迫り来る何かをこらえるような雰囲気だった。

「はああだめええっ……！　そっ、そんなに動いちゃ、そんなに奥突いちゃ、わたし壊れっ、壊れちゃううっ！」

その証拠に、少年の動きが早くなると切羽詰まったように喘いだ。

（ミズねえも感じてる？　僕のおちんちんで？）

内心驚きだったが、実際に彼女は喉を震わせ色っぽい声で鳴いている。ぎゅつとシーツを握る両手は快感をこらえているかのようで、荒い呼吸で揺れる巨乳は先端がびんびんに尖りっぱなしだった。

喘ぐ女性の生の姿とはこんなにも魅力的なものなのか。半ば圧倒される心地で、少年は次々と勃起ペニスを突き出していった。

「はああだめえ！　はげしっ、ユキ激しいっ！　らめ、加減して、加減しなさいっ！」

「ごめんミズねえっ！　でも僕もう止められないっ！」

「ああそんなっ！　バカあ、ユキのくせに、イカせ、ようなんてええ——！」

——くっちゅくっちゅじゅっぶじゅっぶじゅっぶ！

幸久はスパートをかけていた。そもそも童貞にこの快楽を我慢しろという方が無理だ。ペースを守れたのは最初だけで、後は一気に絶頂目がけて駆け上がっていく。

「あふ、ふああああんっ！　やだ、こんなあっ……初めてなのに、こんな大きいのに、わたし、わたし……！」

瑞希もまた、ベッドを軋ませる激しいピストンにひたすら喘がされていった。

少年のエラが粘膜を熱くかきむしるたび、細いくびれがガクンガクン跳ねて大きなヒツプも波打ち揺れる。高まる官能が肌に現れ全身が鮮やかなバラ色になっていく。

「はあっはあっユキい、待って、童貞のくせにそんなあ——んああ胸ええっ！ はあらめ、それらめええっ！」

そこへ少年の唇が舞い降り桃色の突起を含んで吸えば、たわわな乳肉がぶるるんつ！と跳ねて汗珠を散らして揺れて回った。

その上で彼がはつきりと押し掛かり肉棒を深く挿入すると、もう彼女はこみ上げる快感を隠しきれはしなかった。

「ひああらめええ、胸っ、先っぽ吸いながらなんてっ——！ ひああバカあつ、奥でおちんちんぐりぐりしちやつ、いつ、いつちやうのおおっ！」

「はあはあっ僕もだよ、ミズねえ僕もうっ……ああだめ——！」

「はあああらめええっつ！ これ以上らめ、ひああちんちんびくびくつて、ふ、膨らんできてえ——んあああイクうううっつ！」

はつきりと快樂の嬌声をあげて瑞希は腰を大きく浮かせた。柔らかい膣肉が小刻みに震えて収縮によってペニスを搾る。

その心地よい圧迫感が、少年の尿道の栓を開けた。

——どくん！ どくどくどくくんっ！

「あっああああっつ！ くるウ！ 熱いのくるウウッ！」



「ああつ、バカ、だめえつ！ ほ、本番までは……が、学校なのよっ……」

「でもミズねえ、濡れてる。興奮しちゃったんだね？」

「ば、バカっ……そんなこと……」

突然のことに瑞希は恥らったが、そもそも始まりは彼女の方だ。それに光沢ある白いシヨーツにはすでに透明なシミが広がり、狭そうな割れ目にもうっすらと蜜が浮いていた。

「うそついちゃだめだよ。ほら、こんなになつて」

「ひうっ!? んああ指だめえっ!」

少年の指がっぷりと入ると瑞希は可愛い悲鳴をあげた。

「おお、もうぬるぬるしてる。指がどんどん入ってっちやうよ。ああつ、見て、朝だした精液が垂れてきちゃつてる!」

「はああだめえ! ひ、開いちや……漏れてえ……!」

人差し指と中指を入れて割れ目を左右にくちやりと開くと、愛蜜に混じって白いものが溢れてくる。

これは自分が抱いた証なのだ。そう思うと興奮がいや増し、少年は思うまま唇を押し当てていた。

「ひゃあんそんなあつ!? あっついやつ! おま○こ吸うの、はああおま○こにキスう!」

「くちゅっ、じゅるじゅるるっ! どうして、ミズねえキスが好きでしょ? だからここにもキスしちゃうんだ」

「ばっパカッ！ そんなこと——んああらめえっ！」

——ちゆるっ、くちゆくちゆぬちゆぬちゆぬずるずるっ。

身悶える彼女に見惚れながら少年は迷いなくラビアを吸っていく。

改めてよく見れば、女性のヴァギナは大陰唇と小陰唇があることが分かる。小陰唇こそがまさにもう一つの唇であり、繊細そうなピンク色をしている。

じつとりと湿ったその奥を舐めると瑞希はびくびくと腰を震わせる。

「あううっ！ だ、だめえ、声っ、出ちゃう……誰かに、聞かれちゃう……！」

「いいよ出して。ミズねえのエッチな声、僕聞きたい」

さっきの仕返しとばかりに少年は微笑んで舌を這わせる。

今なら彼女の気持ち分かる。相手の恥じらいの仕草というものは責め側の気を大きくさせる。例え自分も危険だとしても歯止めをかけられなかった。

「あっああんっ！ ひぁ奥までえ、し、痺れるウ……あううっ、ユキのくせにいィ……！」

敏感粘膜への熱烈なキスに瑞希はみるみる蕩けていく。奥を舌でねぶられれば内股になつて小刻みに喘いだ。続けてヒップも両手で撫で回すと、声音に切なげな色を混ぜて恥ずかしそうにくびれを振る。

「だ、だめえっ、わたっ、わたしっ、立ってられなくウ……」

——コンコン。

「失礼します。九条会長、まだいますか？」

「ええっ!! あ、そのっ——は、はい、でもちよっと待って!」

彼女が今にも腰砕けそうなきだった。生徒会室のドアがノックされ女子と思しき声でした。

「た、大変、ほんとに誰か来ちゃって……ユキは隠れてっ」

幸久もさすがに焦った。危険は承知していたが、いざ現実になると肝が冷えた。

瑞希は手早く胸元を閉じて（少々乱れていたが仕方ない）汚れた顔をハンカチで拭う。

片や幸久は慌てて教卓の空間に身を潜めた。瑞希がそれを塞ぐように立ち、どうにか顔を整えて、

「ど、どうぞ」

「失礼します。あれ、会長一人ですか？」

「え、ええ。ちよっと用があつて……」

務めて平静を装う声が頭上から聞こえてきた。きっと柔らかな笑みを浮かべて上気した顔を必死にごまかしていることだろう。

狭い空間に難儀しつつも、何とかバレーずに済んだようだと幸久は胸を撫で下ろした。

「そ、それで、どうしたのですか？ もうここも閉めますけれど？」

「ああすいません。さっきのイラストの件なんですけど、修正版ができたらしいのでできれば見てもらいたくて」

相手は生徒会員のようで広報用のイラストを持ってきた様子だった。

「そうですね。でも……明日ではだめかしら？ 今は、ちょよ、ちょよと……」

「それが、今すぐ返事よこせてうるさく言われて。モチベが大事だとかなんとか」「……分かりました。では見せてください」

瑞希は諦めたように言った。生徒会長としての生真面目な一面がそうさせていた。

「これなんですけど、どうですか？」

「……いいですね。前よりよくなっています」

教卓に置かれたイラストを見る瑞希。その表情は幸久には見えないものの、小さく震える両足を見れば、官能の余韻が今も残っているのは明らかだった。

(ミズねえ、もう大洪水っ。ソックスまで濡れちゃってるよ)

教卓の空間からこっそり覗くと、長いおみ足のおかげでミニスカートの中が見えた。

下ろしたショーツは足首に絡まり今もなおそこはノーパンである。散々舐められたピンクの花弁は、絶頂寸前で放置されてヒクヒクと切なげに震えていた。

しかも彼女は、少年の視線を感じているのかさりげなく太腿をもぞもぞさせる。

(ごくっ……僕ももつと舐めたかった。ああ舐めたい。感じてるミズねえもつと見たい)

考えてみれば、これはさっきの意趣返しのチャンスなのだ。今なら彼女は微塵も抵抗できないうちに違いない。

初めてと違っていくらいタズラ心をくすぐられた幸久は、躊躇いつつも思い切って、スカートを捲りもう一度ラビアにキスをしていた。

「ひやうっ!! は、あはあ……!!」

「ど、どうしたんです? どこか問題でも?」

「い……いえ、なんでも……ごめんなさい、突然」

当然というべきか、瑞希は腰を震わせた。変な声が出たが慌てて取り繕う。

ついでに膝でごつんと小突いてきたが、少年は構わずこっそりラビアを吸い続ける。

——ちゆるっ、れろれろれろっ。

「んっ、くふう……!! ゆ、ユキい……」

「え? 雪なんてどこにも描いてないですけど」

「い、いえ、なんでもないのっ。気にしないで、ほんとに」

太腿をひくひく震わせながら瑞希は快楽に耐えてみせていた。内股になった足は落ちそうで、膝蹴りもできないようだった。

思惑どおり、彼女はただ耐えるしかない様子。ピンクの粘膜は気持ち良さげにヒクつくものの、懸命に力む長いおみ足は他人を気にして快感を拒んでいる。

それが何だか可愛く思えて、少年は両手をそっと回す。丸いヒップに掌を添えて崩れ落ちないよう支えてあげつつ、スカートの中に頭を入れて恥毛を鼻先ですりりとくすぐる。

途端にぶるるっ、とわななくヒップ。それをゆったりと撫で回しながら舌を膣内にねつとりと押し込む。

「かはあ……つく、はう……とにかく、大分よくなっていますから。あとは微修正をお願い

いしますっ……」

「は、はあ。それで、どこをどう？」

肩を震わせる瑞希の様子に女子は怪訝そうだった。きっと彼女は真っ赤になって唇を噛んでいるに違いない。

それでも彼女は懸命に指示を出していく。

「こ、このタッチですけれど、こう、もう少し優しい感じで……」

（うん、優しいタッチだね）

無論、自分に言われたものではない。が、少年はちよつと楽しくなって、言われたとおり優しく内側の粘膜を舐めた。

「んああっ！ ち、ちが……そういう、意味じゃ……！」

「は？ 違うんですか？」

「いつ、いえ、違わないわ。そう、優しいタッチで……んあつ、お、お願い……！」

小さく腰をくねらせる彼女に少年はなおも優しくしていく。大陰唇をゆったりと舐めて外側から入念に刺激しつつ、柔らかな恥毛にワザとふうつと鼻息を吹きかける。

その効果は絶大らしく、おみ足はますます内股になってラビアはヒクヒクと小刻みにわななく。愛蜜の量も一気に増えて、甘酸っぱさのある濃厚な香りを放っていた。

「はあ、はあ……そ、それで、この文字はもう少し、つ、強さが欲しいわ。存在をアピールするためにも……はううっ!!」

舌が強く押し込まれて膣内をちゆくちゆくとシェイクすると、瑞希は堪らず声をあげて腰を落とすようになっていた。

彼女と少年の四つの腕がどうかそれを支えるものの、呼吸はいよいよ荒くなって声に湿り気が混じってくる。

「大丈夫ですか会長？ どこか具合でも悪いんですか？」

「はあ、はあ、はあ……ご、ごめんなさい、ちよつと、調子が優れなくて……」

瑞希はそう言うも、いよいよごまかすのは厳しくなってきた。すでに両足ははつきりと震え、太腿の間にはとめどなく愛蜜が伝っている。教壇の上にまで水滴が滴り落ち、覗き込まれればすぐにも気付かれてしまうだろう。

今にも落ちそうなヒップを支えつつ少年もさすがに心配になってきた。これ以上やってイカせてしまったら大変なことになるかもしれない。

けれど目の前のラビアの上端では、小さな淫核がぷっくりと勃起し包皮から顔を出してしまっている。その可愛らしいピンクの真珠はいかにも切なげにヒクついていて、彼はどうしても吸い付かずにはいられなかった。

——ちゅっ、ちゅうううっ！

「んあっ?! あっ、ああ——んはああ……っつっ！」

途端、瑞希の肢体がぶるぶるとわなないて愛蜜の塊がどぶぶっ！ と溢れ出た。

（ミズねえ、イっちゃったんだ！ 分かる、おま○こぎゅうって締まってる！）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!